

道具が語る古代の交流

人が動けばものも動く

道具を調べれば人の交流がわかる

私たちがいま使っているさまざまな道具は、世界中から集まってきていますが、古代の人たちはどうでしょうか。全部自給自足で、細々と道具を使っている……と思ったら大間違い。昔の人たちがいかに旺盛な行動力で、さまざまな道具を調達していたか、ここでは二つの例を見てみましょう。

1・石を求めて

まず一つめは、道具の材料を求めて、古代の人びとが動いた例です。旧石器時代から縄文時代にかけては、道具の材料として重要な石でした。もちろんどんな石でも石器が作れるというわけではなく、石を打ち割るには、なるべく均質でガラスに近い石が適しています。具体的に言うと、ガラスに近い黒曜石やきめの細かい安山岩です。

二つ目は石は、いったいどこから持ってくるのでしょうか。島根県の場合、黒曜石は海を越えた隠岐から持ってくる場合が多かったです。石

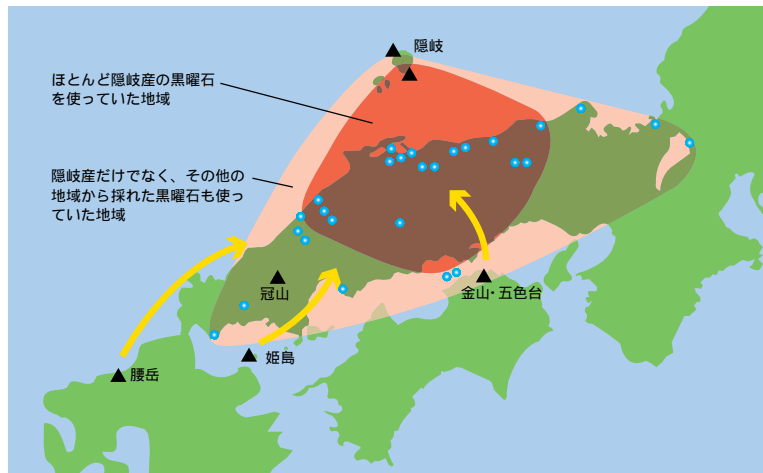
見では、遠く九州で採れた黒曜石も使っています。安山岩は、四国の香川県や広島県の冠山産のものが多く見られます。

2・土器の移動

縄文時代以来、島根県以外で作られた土器が、しばしば県内にはいつてきています。たとえば弥生時代後半（今から二〇〇〇年前）では、九州北部の甕、吉備地方（岡山県）の墓に供える土器、北陸地方の土器、近畿地方の土器、東海地方の土器などがはいつてきています。「倭国大乱」と言われる激動の時代に、島根に暮らす人びとが、さまざまな地域と交流していた姿がうかがえます。

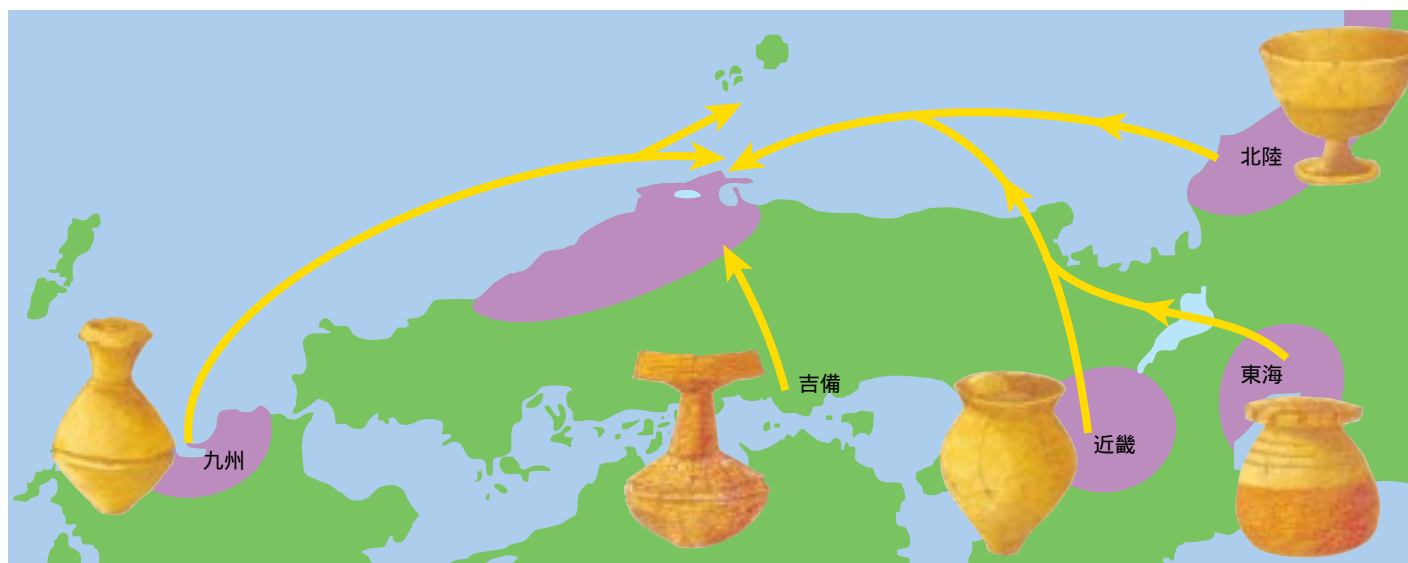
車も飛行機もなかった時代、大昔の人は石や土器を求めて、遠くまで行ったり、交易で手に入れたりしていたのです。これらの例に限らず、私たちの祖先はつねに他地域と交流をしながら生きてきました。古代の人びとが、どのような地域と交流をして暮らしていたのかは、道具の特徴からもわかるのです。

隠岐産黒曜石の分布範囲と島根に入ってくる石の産地



土器や石器がどこから運ばれてきたのか、どうしたらわかるのでしょうか。実は土器は産地により異なる特徴を持っています。考古学者はその特徴を読みとって、土器の生産地を判別するのです。近年は、こうした「人の目」に「科学の目」が加えられるようになりました。とくに多く用いられるのは、蛍光X線分析という方法です。粘土や石を構成している元素の割合の違いによって、土器や石器の材料の産地を知ることができるのです。

弥生時代後期の土器からみた交流



現代の暮らし再発見

これまで見てきたように、本巻では県内で行われた発掘の成果に基づき、古代の暮らしを「生業」「住居」「道具」という三つの視点から復元してきました。

「生業を探る」では、米作り以前（縄文時代以前）と以後（弥生時代以降）に分け、暮らしがどのように変化したかを、日本人の主食となった米作りの開始は、単に食べ物を調達する方法が狩猟採集から稲作に変わったというだけでなく、さまざまな意味で大きな変換点となっています。本巻でも解説したように、日本人の勤勉性や土地に対する愛着は、弥生時代に芽生えたものだったのです。日本人の性質や文化が、いかに米作りと深く関わっているかを感じます。

「住居を探る」では、日本人の住居の原点とも言える「竪穴住居」と「掘立柱建物」を中心に扱いました。これら古代の住居を目にしたとき、われわれ現代人がまず感じる素朴な疑問は、「こんな建物で冬の寒さを感じたのか」「照明のない時代、夜はどうして過ごしていたのか」といったものです。本巻では、とくにこれらの疑問にお答えするようにつまみです。

真夜中でも照明があかあかと灯る現代では、「真の闇夜」というのはなかなか実感しにくい世界ですが、子供のころ、停電のため、さうめんのもとで飯を食べたり、お風呂にはいった経験のある人は、想像しやすいかもしれません。本巻でも紹介したように、各地の資料館・公園・学校などには、復元した古代住居が建っている所も多数あります。二つとした場所でも古代人の生活に思いを馳せるのは、現代の暮らしを見つめなおす絶好の機会となるはずです。

「道具を探る」では、道具の変遷と土器

の変化をたどりました。取材中、太古から現代に至るまでのさまざまな道具を見てきましたが、とくに印象に残ったのは、西川津遺跡から見つかった、弥生時代のさじでした。

私たちが、ふだん何気なく使っているスプーンですが、この形は食事に便利なように、弥生人が自ら加工したもののようです。現代人にとって何の変哲もなく思える素朴な道具も、永い年月をかけて古代人たちが創意工夫を凝らしたすえに考え出されたものだということに、改めて実感させてくれる遺物でした。

私たちの祖先は、本島の豊かな自然を舞台に生活を築いてきました。自然との厳しい闘いは当然あったと考えられますが、宍道湖や中海、肥沃な斐川平野や木々が生い茂る中国山地など、島根県の自然を生かした、地方色あふれる生活を送っていたと考えられます。祖先の生活を支え、現在の私たちの生活を豊かにしてくれるこれらの自然は過去・現在のみならず、未来の島根県にとっても貴重な財産と言えるでしょう。

最後になりますが、本巻では、暮らしを構成する三要素である「衣・食・住」のうち、初めにもお断りしたように、「衣」の部分だけを扱いませんでした。これは県内で見つかった「衣」に関する古代の資料が、埴輪などの間接的な資料をのぞいて少ないからです。しかし、今後さらに科学技術を生かした調査・研究が進むにつれ、「衣」に関する資料も増えてくると考えられます。そのときには、「衣」はもちろんです。今扱った「食」や「住」も、さらに充実した内容で「紹介」できるように。それまでのあいだ、本巻が島根の古代の暮らしの理解に少しでも役立ち、現在の暮らしを見つめ直す契機となることを念じて、本巻を終えたいと思います。

*もっと知りたい人のために

- 佐原真編 『日本古代史5 日本の生活を発掘する 豊饒の大地』集英社 一九八六
- 下條信行編 『古代史復元4 弥生農村の誕生』講談社 一九八九
- 乙益重隆 『日本人の起源8 邪馬台国の誕生』教育社 一九九三
- 飯沼一郎・堀尾尚志 『ものと人間の文化史19 農具』法政大学出版局 一九七六
- 『六道湖・中海 その環境と生物』島根県環境保全課 一九九〇
- 坪井清足編 『復元日本大観5 古代住居と古墳』世界文化社 一九八九
- 稲葉和也・中山繁信 『建築の絵本 日本人のすまい 住居と生活の歴史』彰国社 一九八三
- 神奈川県立埋蔵文化財調査センター編 『神奈川県立埋蔵文化財調査センター』
- 開館10周年記念展 「すまい」の考古学『有隣堂 一九九三
- 佐原真 『日本のあけぼの4 米つくりと日本人』毎日新聞社 一九九〇
- 宍道正年 『島根の考古学アラカルト』 一九八四